

# 中信高校山岳部かわらばん

編集責任者 大西 浩

池田工業高等学校

ヤスィックアゲルの蒼い空 15

## 頂上アタック 2



頂上は間近、最後の壁を攀じる三戸呂君

久根、佐藤パーティが伸ばしたロープを使って、再び先頭に出る。続く1ピッチが最大の核心部だった。固まらない雪、その下の硬い氷、下から見ているとトップの三戸呂君は、まるでロープに繋がれて泳いでいるがごとく、もがいても、もがいても先へ進まずなかなかロープが伸びていかない。確保する手にも力がはいる。時間だけが経過する。

まだロープは半15mも伸びていないところで、上から三戸呂君が叫ぶ。「まだ半分になりませんか！」励ますつもりで「ちょうどハーフだ！ガンバ！」と声を限りに伝える。「ウォーッ！」雄叫びを上げ、自らに檄を飛ばして再び登攀する。3度、4度、5度雄叫びを上げる三戸呂君がこの1ピッチを20分ほどかかってようやく抜けた。そして佐藤君が伸ばした6ピッチ目、疲労がピークに達した松田さんが腰を下ろして動かなくなってしまう。すでに時刻は3時近い。下からそれを見ていた僕は思わずフォローに行き、「なにやってんだ！ふざけるな！」と怒鳴る。「俺はもういい。ここで待っている。」という松田さんを安全地帯までリードした。頂上まであとどのくらいだろう。疲れているのは松田さんだけではなかった。みんなが疲労困憊していた。あとどれくらい登ったら頂上につくのだろう。行く手を塞いでいる10mほどの壁の先が見たかった。三戸呂君にそこまで行って見てきてくれと頼む。壁の先をのぞき込んだ三戸呂君の「大丈夫そうです。」の声を聞き、「行こう。」と松田さんを励ます。それが本当に最後の壁だった。そこを越えると傾斜は緩くなり、一つの高みへ我々は歩を進めた。

頂上まで残り100mほどを残して、先頭に行く三戸呂君が、アンザイレンしている僕のところに下りてきた。「あれが頂上でしょうか？」と聞く。「恐らくそうだが、どうした？」僕がそう言うと、「大西さん、ここからは先に行ってください。大西さんが先に行くべき山です。」と答えた。彼の言わんとしたことを察した僕はすでに涙をこらえられなかった。「何を言ってる。みんなで登った山じゃないか。このままのオーダーでいいんだ。」僕がそう言うと、軽くうなずいた三戸呂君は、踵を返してまた先頭に出た。

それからものの2分とはかからなかったはずだ。蒼穹の下の白い高みで右手を大きく上げて「頂上です！」と雄叫びを上げている彼の姿があった。続いてミッテルの松田隊長が頂上に立つと二人は思わず抱き合った。「高校生に夢を」まさに我々の隊の全てを象徴している感動的な瞬間であった。涙がこぼれて仕方なかった。続いて僕が、さらに佐藤君、久根さんと全員が頂上に立った。どこまでも続く崑崙のやまなみの上には蒼い空

が広がっていた。

感動が一段落して、我にかえって時計を見ると 15 時 17 分 (中国時間 17 時 17 分)。間違いなくこの場所が頂上であることを確認し、この時刻を公式登頂時刻と定めた。改めて周りを見回すと、本当に僕らの立っている場所が他の場所に抜きんでて、この山群全体の盟主として君臨していた。北の氷河の先にはアクサイ河が流れている。北西面はすっぱりと切れ落ち、東面も厳しい雪稜が落ち込んでいた。



今回の登山を象徴する僕の一番好きな写真

下りが心配なので、3 時 45 分には降りようと声をかける。無事下山してこそ成功である。BC の方を見ると我々のたどってきたルートがすべて見えた。ずっと連絡の取れなかった無線で、隊長が今回もまた一方的にヌルさんに呼びかける。「BC ヌルさん、BC ヌルさん、こちら登山隊です。無事登頂しました。今山頂にいます。」その様子を久根さんがビデオに収める。相変わらず BC からは返事がなく、無線機をしまおうとしたその時だった。

「大西さん聞こえますか？大西さん聞こえますか？ヌルです。こちらヌルです。」途切れ途切れにそんな言葉が聞こえたような気がした。久根さんが、「無線がはいってる。」と言う。隊長がしまおうとした無線機を取り出してもう一度ヌルさんと呼ぶ。すると「ヌルです。みなさん、元気ですか。」と返事が返ってきた。なんと、ヌルさんと連絡が復旧したのである。隊長が、そして僕が、頂上からヌルさんに登頂の報告をする。「おめでとうございます。おめでとうございます。」ヌルさんは、何度も何度も祝福してくれた。アラの神のおかげなのか、本当にこの一瞬だけそれまで全く何の反応もなかった無線機の機能が回復した。

後日談だが、この時を最後に再び僕らとヌルさんの間の交信は途絶えてしまう。全くもって不思議な出来事なのだが、このときの無線通信の復旧は今考えても奇跡としかいいようがない。これも BC に帰ってからヌルさんから聞いたのだが、ヌルさんはずっと BC から双眼鏡を覗いて山頂を眺めていたそうである。そして、天気のいいこの日も、登頂してほしいとアラの神に祈りながら、ずっと見ていたという。そしてそのヌルさんの双眼鏡越しに僕らは見えており、登頂したのを見定めて無線を送ったのだ。実際あとで見せてもらったヌルさんのカメラには、頂上稜線を歩く僕らが黒い点になって写っていた。

結局、頂上を後にしたのは4 時を少し回ってしまった。頂上直下の雪稜は緊張しながらもロープを使って安全に下った。ここで何かあったら、元も子もない。みんなにとにかく慎重に下ろうと、口に出すことで自分にも言い聞かせながら、焦る気持ちを抑えてゆっくり下った。稜線から下る際のフィックスドロープは、明日回収することにし、今日はそれを使った。結局、疲労困憊してテントにたどり着いたのは 18:24。ちょうど 12 時間行動していた勘定になる。さっそく留守本部の下岡、宮本両氏に電話で連絡をした。明日の朝刊に載せる原稿を直ちに送った信毎経由で、すでに二人にも連絡が入っていた。